

第3講：10 「えらい遠廻わりをして」

はじめに

現代日本社会において、私たちがさまざまな心の問題に直面している状況をとらえなおすとき、生きることを省察することが求められている。私たち日本人は高度経済成長の中で、たしかに物質的には豊かになったが、臨床心理学の河合隼雄も指摘しているように、「物質的急成長にふさわしい心の成長という点で、遅れをとっている」。心の成長は私たちの生をその深みへ向けて探究し、生の本来的なあり方を自覚することによって促されると言えるであろう。

天理教のコスモロジー（人間観・世界観）によれば、私たちは日々、「元の神」「実の神」としての親神の守護によって生かされて生きている—これが生の根源的事実性である。こうした生の自覚が、いま私たちに求められている。今日、私たちは生の意味理解について大きな転機を迎えている。ここでは、天理教のコスモロジーからみた生の意味理解を踏まえながら、逸話「えらい遠廻わりをして」に込められた意味あいを読み解いてみたい。

逸話の宗教文化的な背景—宗教学の視座から—

まず、この逸話の背景にある日本の宗教文化を宗教学の視座からとらえてみたい。この逸話には、もともと神信心が好きであった榊井キクが「近くはもとより、二里三里の所にある詣り所、願い所で、足を運ばない所は、ほとんどないくらい」であったと記されている。日本人がもっている多神教的あるいは神仏習合的な精神風土が、この逸話の宗教文化的なコンテクスト（脈絡）をなしていることが理解できるであろう。天理教史に精通していた石崎正雄は、教祖が裏守護として言われた神仏が当時、天理周辺でどのように信仰されていたのかを調査したが、その調査研究によれば、現在の天理市周辺には、さまざまな神社仏閣があった。この逸話において、おぢば帰りした榊井キクは、「今日まで、あっちこつちと、詣り信心をしておりました。」と教祖に述べている。その言葉は、その当時の具体的な宗教信仰の様相を端的に示している。

日本の宗教伝統には、「生活慣習としての宗教」と「信仰としての宗教」という二重性がみられる。日本の宗教性は重層構造をなしている。生活慣習としての宗教は年中行事のように生活慣習化していることもあり、ほとんどの場合、生活慣習としての宗教を実践している人々には「宗教」という意識はない。それに対して、信仰としての宗教は個々人がみずから選び取ったものである。「宗教」の語は明治以後、日本社会に定着するようになったが、生活慣習として伝承されてきた諸宗教儀礼は近代以前に醸成されたものであった。それは、たとえば「苦しいときの神頼み」という言葉によって表現されるように、しばしば現世利己的な信仰を特徴としてきた。日本人の宗教性は一言でいえば、宗教学者の山折哲雄が論じるように、「信ずる宗教」というよりも「感ずる宗教」という特質が顕著であると言えるであろう。

病いに込められた意味—生きることの真の意味理解へ—

さらに、この逸話に記されているように、榊井キクは「夫の伊三郎が、ふとした風邪から喘息になり、それがなかなか治ら

ない」ので、「目に見えない綱でも、引き寄せられるような気がして」、おぢば帰りをした。その榊井キクに対して、教祖は「待っていた、待っていた。」と迎えられる。このように教祖が、お屋敷へ帰ってきた人たちに「待っていた」とか「親神が手を引いて連れて帰ったのやで」などと、優しく温かいお言葉をかけて迎えられる逸話は少なくない。教祖のこうしたお言葉は、親神が身上のさわりや事情のもつれをとおして、人びとをおぢばへ引き寄せられることを示唆している。

当時、伝統的な庶民信仰において、病いや災いは神霊などの祟りによって引き起こされると考えられていた。そのために、拝み祈祷などの伝統的な宗教儀礼や慣習が祟りを排除するためにおこなわれていた。ところが、榊井キクが引き寄せられるようにお屋敷へ帰り、教祖からお言葉を頂戴する一連の場面からは、単に庶民信仰的な病いの救済に終わるのではなく、生きることの根源的な意味や存在根拠、すなわち「だめの教え」を伝えたいという親神の根源的救済を読み取ることができる。つまり、一般的に病いといわれているものは、親神が私たち人間の心得違いを知らせて反省を促し、心の成人への機会を与えるために、身上にしるしを見せられるものである。親神は身上にさわりをつけて、「陽気ぐらし」という生の本来的なあり方へと導かれる。

親神の根源的啓示とその信仰

さらに逸話には、教祖は「あんた、あっちこつちとえらい遠廻わりをしておいでたんやなあ。おかしいなあ。ここへお出でたら、皆んなおいでになるのに。」と記されている。教祖のこのお言葉からは、庶民信仰の対象としての神仏を包越する親神の存在とその守護を伝えようとする親心が感じられる。その当時、一般庶民のあいだで親しまれていた神仏の中には、今もなお多くの人々の信仰を集めているものもある。教祖の教えを聞いて直弟子たちがまとめた「こぶき話」には、神仏による「見立て」が記されている。それは親神の守護の世界を、当時の人々が理解しやすいように説かれたものである。この「見立て」によって、親神が神仏の根源であり、この世界は親神の十全の守護の世界であることが明らかになる。この道の信仰において、神仏による「見立て」を辿っていくところに、私たちの心のほこりも次第に払われ、私たちは日常経験的な知には隠されている私たちの本来的なあり方を自覚することができる。

教祖のこのお言葉を聞いて、榊井キクは「ほんに成る程、これこそ本当の親や。」と、何んとも言えぬ慕わしさが胸の底まで沁みわたり、強い感激に打たれた。それは親神こそ「元の神」「実の神」であり、あらゆる生命の根源であると感じ入った瞬間であったと言えるであろう。つまり、この逸話は人びとの日常生活と密着した庶民信仰の場面で、教祖が親神の守護を説かれたものであり、日常的な意味世界を超えて、生の本質的なあり方を開示している。たとえ異なる神仏が多く存在する中でも、その根源には「元の神」「実の神」である親神の守護があるとの生の根源的事実性が、この逸話をとおして示されていると言えるであろう。